

# 馬を用いた活動導入の試み

鈴木 卓郎

(石川県立錦城養護学校)

## 学校概要と取組みの経緯

本校は石川県最南端に位置する全校生徒36人の小規模の知的障害養護学校である。

平成13年度より、石川県は予算総額1億円を計上し、特色ある学校作りを目指した「県立学校活性化マイプラン」を開始した。本校中学部の馬を用いた学習はこれに採用され実施した。

本校中学部は障害者が馬と関わる事がさまざまな効果を上げていることに関心をもっていただけと、生徒が能動的に活動できる教材の必要性を感じていたのが実践の理由である。

馬を用いた学習を行うのは平成13年がはじめてで、試験的な意味合いが大きい。「県立学校活性化マイプラン」は毎年度当初に実施案を県教育委員会に提出し審査される1年区切りの事業のため、数年計画で行う研究的な要素を持たせることが困難なので、総合的な学習の時間を利用して季節的にも活動しやすい10月下旬から11月初旬の3回実施した。

馬を教材として用いた授業は、石川県内養護学校でも初めての取り組みで、本校中学部教員の誰もが馬と、ホースセラピーに関する情報は知識がなく、受け入れ施設なども手探りの状態であった。

承認後、本格的な始動に至るまで、我々は情報の収集、様々な手配、受け入れ先との連絡調整を繰り返し行った。

今回の事業を開始するにあたり、国立特殊教育総合研究所の滝坂信一氏に指導を求めるとともに、長野県木曾養護学校の馬を用いた授業実践を見学するなどして基盤を固めた。

学部の研究会ではこれらの情報をもとに話し合いを行い、生徒の様子に適した活動を模索した。中学部の教師全員で乗馬・厩舎作業の体験とスタッフとの連携を目的として、夏季休業中を利用し石川県馬事振興協会で研修を行った。初めて見る馬の大きさや仕草に圧倒され、教員のなかには当初不安な様子も見られた。教員の中には小動物類が苦手な者もいたが、馬の温かさや、やさしい瞳に愛着がわき、コンプレックスを解消したという逸話もある。

教師自身が研修をしたことで、想像から具体的な実践の計画を立てる大きな一助になった。協会も、障害者を本格的に乗馬させるのは初めての試みであるため、インストラクターも、情報交換に熱意をもって応じてくれた。

## 1. 指導計画について

生徒が自主的、能動的に活動がしやすいよう、教員は、現地スタッフと生徒の橋渡しのな中立的立場をとり、援助を求められた時にその意志を円滑に実現できるよう適正な支援のしかたや、様子を観察しながら、新たな指導方針を模索する。事後の指導記録を基に多方面から個の可能性を見出すことができると考えた。

指導記録の方法は、

- ① 生徒の障害のようす
  - ② 2学期までの学校生活のようす
  - ③ 3日間の学習の記録
  - ④ 馬を学習に用いた考察
  - ⑤ 馬の学習は個別指導計画の長期目標にどのような影響があったか
  - ⑥ 特記・引継ぎ事項
- で構成した。

## 2. 導入の授業から実施へ

導入の授業では、教師の話(解説)で馬に関する先入観を与えないために、必要最低限の発言は控え、生徒が入室を済ませるとすぐにビデオで馬の姿やいななきを放映した。

自分たちが見たことのない映像に全員が集中して画面を見る様子があった。集中が持続しにくい自閉的傾向の強い生徒も、普段に比べ画面を注視する時間が長いようであった。内容が進むにつれて、興味がわいたのか「ここはどこにあるの?」(金沢馬事公苑の所在地)「大きいな、こんな大きい乗れないよ」等の発問があった。

ビデオ終了後は、教員が夏季休業中に行った研修の写真を回し見したり、実物の蹄鉄に触れたが、形状と素材の違いに気付く発問もあった。

導入後は、中学部の多目的広場に掲示してある金沢馬事公苑のパンフレットを見て料金を調べる生徒、展示してある蹄鉄に触れる生徒の姿を見ると、当日どのような反応や様子が見られるのか楽しみでもあった。

(第1日目:10月26日)朝夕が少しずつ肌寒くなりつつあるが登校してきた生徒は皆元気そうである。天候にも恵まれ、気温も少しずつ上がってきているようだ。現地に着くと、すでに報道関係者が大挙しており、対応しているうちに開始式も遅れて始めることになった。私たちの活

動を撮影しようと、移動するのと同じにカメラが付いて周り教員も緊張してしまい、事前に打ち合わせた動きができないままに活動が始まった。声かけする口調だけはやさしいが、実際には教師が先導した活動になってしまっていた。ポニーを見た生徒の中には泣いたり、怖がる生徒もいれば、その場で馬に跨ごうとする生徒など反応は様々であった。

2つの班が乗馬・厩舎作業を午前・午後交代に、厩舎作業班はボロ取りや水足しを、乗馬班は練習馬場でポニーの乗馬を行った。この日は全スタッフとボランティアの会員がサイドウォーカー、乗・下馬の補助、あらゆる面においてサポートしてくれた。

(第2日目：11月2日)前日の雨で練習馬場が使用できないため追い馬場で行う。この日からサラブレッドのユニック号(23才・雌)で行う。怖がる生徒もいたが、一度乗ってしまうと楽しそうである。S.Aの乗馬が問題に上がったが、井谷インストラクターからS.Aを前に乗せてみようか等きめ細やかな配慮や、1人1人の発進の確認など積極的な関わりをしていただいた。

馬事振興協会チーフを交えた昼食時は、生徒達にとっても気兼ねなく話しができたようで、普段の遠足などとは違う社会体験的な時間であった。教員もこの間を利用し、情報交換や午後の活動の予定確認を行うなど有効に利用した。自由時間の生徒は、それぞれが敷地内で好きな活動を楽しんでいた。厩舎の馬に人參を与える者、練習馬場の外周を歩く者、クラブハウスのソファで休む者。もしかしたら、この時間が唯一、自分の意思で馬とその環境の中で能動的に活動できた時間であったかもしれない。

厩舎作業が早く終了した時間はチーフの配慮で生徒は馬に乗せてもらうことができ、大喜びであった。

(第3日目：11月9日)どの生徒も活動にコツを得たようで、馬が近づいても以前ほど怖がる様子は少ない。馬の居る馬房に入ってのボロ取りを体験したり、別棟の競走馬に餌を与えるなど、本格的な作業を行った。乗馬は午前・午後とも前回と同じユニック号であったため生徒らも親しみを感じているようだった。1人で鞍に乗れる生徒は積極的に自分の力で乗るよう酒井チーフから指導を受けたが、学校と違い「まずはやってみよう」という気持ちの後押しがあったように感じた。発進の声掛けや合図、下りた後の挨拶は、声の大きさや意思が初回よりも強調されつつあり。自閉的傾向の強い生徒は常歩で100m程歩くと表情が弛緩するようにも見えた。生徒の中には自分で手綱を持って発進、停止、常歩を経験した者もあり、思うようにいかない馬の操作に驚きと困惑の声を上げていた。

全ての活動終了後に会員の高木さんより模範乗馬を見せていただいた。今まで自分達が乗っていたユニック号が常歩から早足になるとスピードと鼻息、蹄の蹴る音に驚きの声を上げていた。

クラブハウスでの終了式は、馬事振興会会長は不在であったが、中学部の作業学習で製作した観葉植物入りの鉢を差し上げ、生徒代表がお礼の言葉を述べた。チーフの方からも「また是非いらして下さい」との言葉も頂いたこともあり、帰り際には「また来るね」と手を振る生徒も見られた。

初めて馬を見たときの「驚き」や乗れた「達成感」その他、個々に感じたことは様々だろうが、活動を通して「馬はきれい」と言う(感じた)生徒はいなかったのではないだろうか。

「馬がもたらす癒し」効果は科学的には証明されていないが、活動を通して感じたことは馬と生徒が互いに引き合う「なにか」が介在していたかもしれないということである。

実際にユニック号は活動中、非常に従順であり対応の遅い生徒らにも我慢強く待っていてくれた。ユニック号の性格は「大人には厳しい馬だが、子どもには優しい…」というチーフの方からの言葉から、もしかしたら先述のようなことが生徒と馬の間で、できていたのかもしれないと思った。

### 3. 二人の生徒の事例から

さて、前述したように本実践は試験的な活動であったため、活動の記録が重点的で、馬を用いた学習における目標設定と評価の視点が絞られていない。あえて指標を持たせるとすれば、記録項目⑤自立活動年間指導計画の長期目標と馬の学習の影響が該当すると思われる。以下、これらを前提に、2つの事例をあげる。

#### (1) 事例 1

中学部2年生のF(男14才)は自閉的傾向が強く奇声とチック様の様子が日常的に見られる。コミュニケーションは一方的で独り言がある。テレビや書物による知識でのみ馬を知っている。奇声の軽減が長期目標になっており、今2学期から服薬を開始している。この頃から奇声徐徐に減少し始めている。

導入で用いたビデオ視聴時、馬のいななきや蹄の音に反応を示し所在地等の発問があった。導入後は、多目的広場に掲示してある金沢馬事公苑のパンフレットを見て料金を調べ、展示してある蹄鉄をしきりに触っている姿が多く見られたので、前向きな興味があるのではないかと推測した。

《3日間の学習の記録》

10月26日(金)

高揚した表情で登校してくる。教師への話しかけも多い。現地が近づき、馬事公苑敷地に放牧されている馬を見つけると、「あーっ」と驚いて身を乗り出す。

Fの班は午前中厩務作業だったが、周りの設備などに意

識が逸れて作業手順などの説明を聞いてない。他方、保有数や最年長の馬、体長や重さに興味を示し、質問をしては説明を聞いて感心していた。

インストラクターが「馬をひいてくれる人」と班全員に声をかけると、大きな声で「はい」と返事をし、率先して手綱を持つが、曳き馬をしながら自分の関心をひかれた方向へ行ってしまう。

裏掘りの説明を受けたが、自力で馬の脚を支えることができず、インストラクターに持ってもらうが、逆に掘ったり、我流にしてしまうことが多い。

昼食後の自由時間に馬を見に行く。スティック状にした人参を持っているが、馬が顔を伸ばしても自分に触れないうちだろと思われる距離から眺める。自分から人参をやろうとするが、馬が口を伸ばしてくると人参を離してしまう。落ちた人参は自分で拾い飼馬桶に投げ入れる。

午後の活動に必要なヘルメット、ブーツを自発的に借りに行く。

曳き馬で練習馬場を2周後、取材に来ていたテレビ局のアナウンサーからもう少し乗って欲しいとの依頼があり、快諾する。手を振る余裕も見られる。アナウンサーの質問に「揺れて地震みたい」「眺めがすごくいい!」「ふっくらした感じで可愛い」「もっと乗りたい」と、積極的・好意的に楽しむ様子が見られる。初めて体験する揺れや馬の仕草に恐々とする様子があるが、活動中は馬の近くにいることが多い。これらの様子から、馬に好意を持って接していると教員は確信する。瞬間的に呼気したような「エッ」「ヒッ」等の声をあげるが、昼休みは「ヒヒーン」と馬がいなくなような声を繰り返し出している様子が見られ、興味深い。

活動中、時折「サラブレッドって立派だな」「サラブレッドって…」と大きな馬を意識する発言が多く見られた。

#### 11月2日(金)

バスの中でサラブレッドに乗る活動であることを知らされると「一度乗ってみたいかった!」と発言。意気勇んでクラブハウスに入り、大きな声であいさつをし、受付を済ませてブーツ・ヘルメットを自ら借り着用する。インストラクターからの「でかいの乗れる人」の問いかけに、すかさず「ハイ!」と答える。ユニック号(24才雌)の馬装のため、同班の生徒が別ゲートへ曳き馬するが、禁止されている馬の後ろを歩いてしまう。インストラクターに「ろく」の質問をするが、説明が続いているにもかかわらず途中で興味をひかれた方に行ってしまう。

補助してもらい騎乗する。高さや不安定さからか「こええー」と言う。本人の意思を確認してからインストラクターの曳き馬で発進する。

周回を重ねると表情も和らぎ、待っている生徒付近になると笑顔が見られる。2順目以降はインストラクターからの促しもあり、自分の力で騎乗する。自分で乗れたことに

笑顔が見られる。大きな声で「お願いします」と言う。下馬後の馬への愛撫は数回指先でなでる程度で、儀式的に行っているように見える。順番を待っている間は身体全体を強く緊張させたり奇声をあげて周囲を徘徊し、馬の後ろに行きそうになって注意を受ける。

#### 11月9日(金)

インストラクターから、1人で鞍に上がるようよう促され、アドバイスを受けながら自力で鞍に登り座る。着座直後は「こええ」と言う。3回目の今日は発進・停止・回転を習う。インストラクターが、馬を口笛で導いていたので怖がる様子は見られない。馬が指示通りに動くときと安心した表情をする。搬送される競馬馬を見て「競馬馬って立派だな」と言い、模範馬術には「スピードを自由に扱っている」と発言する。当日の予定が終了した後に全員が自由に人参を与える時間を設けた。馬が口にくわえる前に人参を離してしまうことは変わらないが、1、2回目より色々な馬に人参を与えようとする姿が見られた。

#### (2) 事例 2

中学部2年生のU(女14才)は自閉的傾向が強く、オウム返しのような会話が多い。拒否は、はっきりと伝えることができる。動物に対して興味はあるが、小動物が苦手である。犬などの動物との関わりは、綱でしっかりと縛られているときは近くに寄る事ができるが、そうでない時は怖がる。

馬という動物と「馬」という名前は一致しているが実物は知らない。1学期は不快な声や音、苦手な生徒の姿が見えると不安定になり、自・他傷行為を伴うパニックになること多く見られた。2学期に入ると、言葉で不快を伝えられるようになり、我慢できないときは、「その場を離れたい」と伝えることができるようになっている。

#### 《3日間の学習の記録》

#### 10月26日(金)

バスから降りクラブハウスに挨拶に行く途中から「馬に乗らない」と独り言を繰り返していた。厩舎入口近くのサラブレッドに生徒が集まり見えていたが、Uは「こわーい」と言って近づこうとはせず離れたところで見ていた。この間不安定な状態が見られたが、ポニーの馬装をするため、別の馬房に教師に寄り添うように向かった。ポニーが馬房にいるときも5メートル以上は離れたところで見ていた。ブラッシングや馬装をするときも怖がって近寄ることができない。インストラクターの「ブラッシングをしようか?」の声かけにも「しない」といって近寄らない。不安定な状態が続いたが、練習馬場でポニーに乗る友達を見ているうちに表情にも落ち着きが見え始める。

N教諭に「一緒に乗る?」と言われ「一緒に乗る」と言う。恐る恐るではあるが、ゆっくりポニーの側に近寄りポニーに乗る。表情は緊張しているが、横にN教諭がついて馬場

を二周することができた。1周目はN教諭の手を握っていたが、2周目は教師の促しもあり鞍の取っ手を掴んで乗る様子が見られた。

ポニーから降りた後は、緊張が解けたのか、隣の練習馬場でジャンプしたり走ったりしていた。

ポニーを馬房に戻し、ブラッシングするためにロープで繋いだところを確認してから、初めて自分で近づく。初めは柵越しに見ていたが、友達が馬装を解く姿をじっと見ているので「してみようか。」と声をかけてみた。ポニーの顔のほうに教師が立ち、ポニーの顔がUに接近しないように工夫することでブラッシングをすることができた。教師が手でポニーの背中をなで「かわいいね」「やさしい」「きもちいいね」などと言うと、Uも「かわいいね」と言いながらなでた。ポニーの活動が終わると自ら厩舎の入口に行き馬たちをじっと見ている。そのとき「やさしいね」と自分に言い聞かせるように繰り返し言っていた。

午後の厩舎活動は、馬の顔が寄ってくると怖がるので間に教師が立って行った。馬の顔が近づく怖がってホースを離してしまう。馬のいない馬房のボロ取りは臭いを嫌がるかと予測していたが、気にすることなく活動を続けていた。

昼休みの自由活動で馬房にいる馬の腰辺りを「かわいいー」といいながら、いつでも逃げられる態勢でなでていた。人參はもう少しのところまでやることができなかった。

#### 11月2日（金）

行きのバスの中では「馬かわいいね」と繰り返す。先週の日曜日に保護者の会が出張レッスンを依頼し、このときも馬に乗ったこともあるのか、前回のよう緊張した様子はあまりない。

到着後厩舎通路からポニーに会いに行っていたが、怖がらず近づくことができたので、人參を渡すとポニーが口にくわえるまで持っていることができた。（人參は前回の2倍の長さに配慮した）

午前の厩務作業は、手順を覚えていて、足でおがくずをよけ、出てきたボロを取る様子が見られた。厩舎の掃き掃除は、馬のいない馬房の前を掃除した。水やりは前回と同じく馬が顔を出す所は怖がる。しかし今日はホースを離してしまうことはなかった。餌やりは馬が騒々しく、とても怖がったので馬のいない飼馬桶のえさやりを行った。

午後に、乗馬するサラブレッドを馬房から曳き連れるとき手綱を持つことはできなかったが、横について歩くことはできた。馬場では友達の乗る姿を静かに見ているが、「Uが乗る番だよ」と知らせると、前回とは違い自らさっと馬の側にいった。インストラクターに支えてもらいながら鞍に乗り一周した後、はっきりした口調で「行く」と言ったので、もう一周する。二週目で止まったとき「降りる」と言ったので下馬する。少し緊張した表情が見られたが、

二週目は周りの景色を眺める様子があり余裕があるように見えた。2順目に「乗る？」と聞くと「乗る」と言うので馬の側まで行ったが「乗らない」と戻りそうになったので、「もう一回だけ乗ろうか」と声をかけると「乗る」と言って乗った。一周すると「降りる」と言ったので下馬する。最後に人參をやるよう促してみたが難しかった。しかし、サラブレッドの額を触ることができた。

#### 11月9日（金）

到着後、厩舎の中に入る。恐々とした様子だが人參をやることができた。午前の活動では、馬房から馬を出し馬装する手伝いができた。

Uが恐怖感をもつ前に乗れるよう配慮したが、友達が先に乗ることになったので、次に乗ることになった。今日は怖がることなくスムーズに乗ることができた。乗っているときは前回に比べて姿勢も良く、顔もリラックスしていたように思う。練習馬場をインストラクターの曳き馬で2周した。2順目からは、乗馬・下馬が自分でできるようになった。2順目以降、意欲のある生徒の確認をしたかったので、希望する生徒を募るとUは真っ先に手を挙げる。3順目、4順目も同様に手を上げた。4順目の後半は、インストラクターが曳き綱を放し1人で馬に乗らせてくれたが、手綱を放したことに気づくと表情が硬くなった。

#### （3）事例の考察と成果

両者とも新しい活動には消極的だが、馬の学習においてのFは導入時から馬に関心を持つようすと、3回の活動内容や馬に対しても積極的かつ好意的であった。Fはマイペースな行動も時にあったが、学校での形式的な挨拶ではなく、受付や、インストラクターに対する生き活きとした発問、自らブーツやヘルメットを借りに行く等の積極的で、かつ自発的な行動が見られた。乗馬中は緊張してせいか、この間の奇声は減少しているが、順番を待っている間は奇声と徘徊が再度見られる。

乗馬中奇声の減少は認められるが、Fの生活でどのような時と場面に発生するのか掌握できていない事と、実施回数が少ないので、乗馬が奇声の減少に何らかの作用があるか否かは判断できにくい。

実物の馬を見ると混乱してしまったUは、動物に苦手意識があるので関わり方を配慮したつもりだが、初日の「馬乗らない？」の拒否サインを受け止め、自己決定がなされるまで待つ必要があった。活動全体的にUが怖がらないよう教師が先行した声掛け・促しをしたことで、Uが真意で馬と、その活動に関わろうとしたかを阻んでしまった可能性が大きい。Uは段階的に乗馬方法を体験できたことも成果であるが、それは活動を進める上で行われたものであって、Uが希望する馬への関わり方を実現した上での成果は、これらとは別の視点から検討して見る必要があるであろう。

## 4. 全体の考察

生徒に見られた行動から、「今の自分は何々をしたい」という欲求から「実現する」ためにはどのような行動をすべきか」に至るセルフマネジメントが明確に行われている様子を窺うことができた。このような積極的な活動は随所に見られた。

他方、要求の表現を明確に行うことに困難があり、同時に馬に対して恐怖心を持っている自閉的傾向の生徒に対して援助をしようとする場合、教師が真意を汲もうとして過剰なかかわりをしてしまうことがある。その結果、生徒自身が自発的な行動として乗馬を行ったのか教師が「乗せてしまった」のかについての判断が非常に困難になってしまう。教師は活動の性質をより理解しながら慎重に関わらなければ自己決定の土壌は養われないであろう。

このように、「自己実現の過程」が指導者の独断で削がれてしまった可能性があることは、本校が今後、様々な場面で生徒の学習支援を行う上での大きな反省点でもあり、課題である。自己決定を育む活動として「したい」「して下さい」という実現欲求が湧き、自らが持ち得る伝達手段で伝え、実現できる満足感、学校の授業ではなかなか実現しにくいものであろう。殊更、教師・生徒という関係の中で得ようとするならば教師は高度な技術と人格が必要かもしれない。

馬と、障害のある生徒が互いに許容し、共鳴しあう関係は、障害者が健常者に対し伝達するよりもストレスが少ないかもしれない。障害者の乗馬方法の体得は、これらの関係が成されているならば、よりストレスの少ない状況下で満足感を得られる活動と考える。

科学的には証明されてはいないが、乗馬のような数少ない非日常的活動で得るポジティブな体験は、情緒の安定・人格形成に良い影響を与えるのではないだろうか。障害を持つ子供の保護者の多くは、我が子の心身の成長に惜しまない努力を注ぎ、可能性を引き出す多くの情報と活動を求めていることに違いない。成長の喜びは、育む糧となり子へ還元される好適な循環が障害者とその親に潤いをもたらすだろう。馬を用いた学習は、その可能性を導きやすい教材として有効だと思うし、多くの実践が行われる中から更に有効な手段を発見してもらいたい。

馬を用いた学習における結果・評価は「馬に乗れた」「関わられた」までの間、生徒自らの迷いから生み出され、自己決定するまでのプロセスが全てであると言っても構わないと思うし、指導者が自発的な行動を見守れる姿勢が基本であってこそ、生徒はその姿をより明確に映し出してくれると活動を終えて痛感した。

## 5. 反省点と今後への展望

### (1) 開催時期と回数について

実施回数が少なく、継続的な実施と経過を観察できなかったため、わずかな記録からは新たな支援方法を導き出すに至らなかった。今後以下のような工夫をしていく必要がある。

年度当初から季節などを考慮しても、可能であると思われる回数を行いたい。今年度は試験的な3回限りだったが、子どもたちには慣れるまでには至らなかった様子が見られるし、慣れていくことで生徒達の余裕も出るようになってくると思う。次年度は生徒の負担が大きい冬季を除いて毎月1～2回行いながら、生徒自らが「本当にしてみたい」活動をみつけ目的的に行動する様子が見られるような実施を工夫したい。

### (2) 実施場所について

県のほぼ最南端に位置する本校から、金沢市校外の石川県馬事振興協会までは、約60kmあるが、双方施設の近辺にはインターチェンジがあるため、高速道路を使用すれば50分程で現地まで移動できる。この間を利用して、その日の活動を知らせ生徒の健康状態などを見ることができた。帰路は馬に乗った思い出を生徒と共に話したり、次回の要望や反省点などを話し合う良い機会になった。生徒らもバスの揺れと馬に乗ったことで心地よい疲労感を覚えたようであった。

### (3) 移動手段について

障害のある人達の望む活動が移動を必要とする場合には、障害者・介助者双方の負担を最小限、かつ最善の移動方法を模索しなければならない。

### (4) 活動時間について

午前中2時間、午後1時間30分の活動時間の設定理由は、生徒の登下校の時刻、現地までの移動時間、昼食・休憩時間を総合的に配分したためである。乗馬と厩舎作業班に分けた少人数の活動は、厩舎作業では生徒1人1人がインストラクターとの十分な関わりに、乗馬では待ち時間の短縮につながった。

### (5) 活動の展開と指導について

この活動は、個別の指導計画に立てた自立活動のいずれの目標に、馬の学習はどのような効果があるのか、生徒自らが能動的に行動するのにとって教師のどのような支援が最適なのか、また、支援方法が適切であるかどうかを考える良い機会であると考えた。

私達は、第1に子どもの「馬に対する興味」と願い(見

る、触れる、乗る)の尊重、第2に子どもとインストラクターとの交流や厩舎作業などの過程で必要が生じた場合のみの補助(橋渡しの存在)を心がけた。なぜならば、触って見たい、抱いてみたいという内発的動機は教師が先導してしまうことによって、その現われを阻害してしまう可能性があり、能動的な活動にはならないと思われたからである。

実際の場面では、回数を重ねるごとに生徒の乗馬意欲が増す様子が見られ、乗馬までの時間を待ちきれない生徒が見られた。また、本心は馬に触れてみたいのになかなか決心がつかずに泣いている生徒への「触りたい」意欲を配慮し、自ら触れるまで待つことが大切なのか、それとも「生徒に最も良いと思われる方法で教師が触れるよう支援すること」が結果として「触れてみたい」という意欲を実現することになるのかが論点となった。他方、私たち教師自身の中に「3回しかないのだから、せめて1回でも…」という気持ちが生まれ、無意識のうちに教師主導の展開にしてしまった点があった。馬を見る、触れる、そして「何々をしたい」という生徒自身の自己決定の意欲を、計画不足と環境の不整備、教師自身の不慣れの為に、最も重要な部分が削がれてしまったことは大きな反省であり、次年度活動を行う際に改善の不可欠な点である。経験を重ね、様々な局面での配慮や対応方法を熟知することを通じ、その都度に起こる一つ一つのことに対処していくことができると考えるが、活動を重ねるたびにまた新たな課題が生まれるかもしれないという予感を禁じ得ない。

また、企画者の力量の不足から、教員への理解・説明の不徹底、現地スタッフへの的確でない要望の伝達と、「何をどこまで」という活動を行う上での目標が明確に示せなかったことも反省の一つである。

以下、まとめて主な改善点を挙げる。

- ・今年度の反省を基に新たな目標の設定もしくは改善を行う。
- ・記録したプロセスを、評価する手段が必要。
- ・教師個人が認識を深め、指導の共通理解を図る。
- ・個に応じた活動の細分化と手法の選択肢を増やし内容を充実させる。
- ・そのためにインストラクターとの綿密な打ち合わせや、活動の理解を求める。
- ・活動経費の根拠が1年毎に更新されるため、長期的な記録が保証されない。長いスパンでの記録を得るためにも、継続的な取り組みが必要である。

なお、今回の活動では、小松療育園の作業療法士、西川亜希子先生に同行・ご指導をいただいた。活動を行う前にも肢体不自由者と乗馬の効果などたくさんの資料を提供していただきながら、本職の合間を縫って1、3回目共、専門的な指導やアイデアを受けられたことは大きな収穫であった。今後も協力を得ながら、肢体不自由のある生徒の

乗馬による効果を長期的に観察してみたい。

## 【資料】

### 1. 実施施設

(社)石川県馬事振興協会

所在地:金沢市八田町西1番地 076-258-5740

概要

(馬場)

練習馬場(20×70m)

障害飛越競技場(70×70m)

馬場馬術競技場(20×60m)

屋内馬場(40×20m)

(施設)

A 厩舎(27頭収容)

B 厩舎(15頭収容)

C 厩舎(17頭収容)

外来厩舎(42頭収容)

クラブハウス(更衣室、シャワー室、休憩室、会議室、事務室、観覧スタンド)

### 2. 施設における障害者対応の経験

県内授産施設の成人や、肢体不自由養護学校の遠足で障害者をポニーで周回する乗馬を行ったことがある。サラブレッドの乗馬は安全配慮上行っておらず、錦城養護学校が初めてである。障害者を乗馬させるときに、どのようなレッスンを行えばよいのか具体的な内容の指示がなかったため、今回はより多く馬に関わりを持ってもらう事が最適と考え、規定の時間を設けずに行った。馬具等特別な物を用意することはしなかった。作業手順や、乗馬方法についての説明は、なるべく簡単な言葉をつかうよう配慮した。今年は、双方共が初めての試みであったため、共通理解が図れていなかった。活動は馬術習得の要素が多かったと感じる。このことから馬を用いた教育活動を補助するには、インストラクターがどのように馬を操ればよいのか分からなかった。

### 3. 実施に関わる経済的な根拠

平成13年度石川県教育委員会が行った「県立学校活性化マイプラン」に承認され実施した。

- ・総事業費 … 254千円
- ・使用料 … 64千円  
(生徒乗馬料、教員夏季研修での乗馬料)
- ・賃借料 … 189千円  
(借り上げバス)
- ・役務費 … 1千円  
(礼状切手代金)

以上